

大学教育における教授・学習過程と学生の発達過程の関連 (7)

— 指導教官決定要因の思考実験 (1) —

佐藤 公代

(教育心理学教室)

(平成17年6月3日受理)

The Teaching-Learning Process in University Education (7) — Thinking about Factor of Determining Teachers' Consultant (1) —

Kimiyo Satou

(問題と目的)

最近、筆者の身近なところで、A指導教員からB指導教員に学生自ら変えたり、C指導教員から指導教員を変更せよとのトップからの命令がでたりと、30年勤務中、このようなことはなかったと記憶している。なぜ、このようなことが起こるのだろうか。

佐藤(2004)は、「指導教官決定要因の検討」において、10個の要因をみだし、列挙した。これを参考に思考実験を試みる。仮説は次の通りである。

(1) 学生との信頼関係なしには指導は無理であろう。如何に信頼関係を築くかが指導教員の力量であり、プロ意識をもつことであろう。

(2) 特に院生の場合は、問題意識を大事に導いていくことによって、底力を発揮するのである。

(方法)

- 1) 客観的データの無い中で、筆者の思考実験を試みる。
- 2) 対象者：4人(男1人、女3人)

(結果と考察)

A指導教員からB指導教員に移動した2人(男1人、女1人)は、分野がA教員なので、機械的に選択したのである。ところが、指導を受けている途中で、自分のやりたいことと違うと思い、B教員に話をつけて変更したと思われる。賢いやり方だと思う反面、まわりの人間関係がみえているのだろうかとか疑問にも思う。論文を書くのは自分であり、指導教員はその手助けをするだけなのだから、別に変更しなくともやれるのではないかと思う。手助けというのは、要所要所をつかんで適切に

アドヴァイスすることであり、放任主義でもなければ、手取り足取り指導することでもない。学生の自主性をそこねないように指導するべきであろう。そのような中で、信頼関係の築けない問題がでてくる。指導教員で完全な人は少ないのではないだろうか。そんな状況の中で、不満があってもカバーしながらやっていくのが、うまいやり方だと思う。良い意味でも悪い意味でも要領の良い学生は、そつなく指導教員を変更してやっていけるのであろうが、表面上は、みな大人なので、かげで悪口を言い合ったり、不満を述べたりしていても何も解決しないと思われる。C指導教員からD指導教員に変わったのは、研究の内容がC教員の内容とは違ってきているので、C教員から、指導教員を変えるようにという指示を受けてD教員を尋ねてきて変更になったのである。

トップから指導教員を変えるようにという命令らしきものは、それこそ、公の場での事実関係が明らかにならないまま(明らかにすることがタブーなのかと筆者自身遠慮していたきらいがあるが)、本人にとって、指導教員変更で論文を書くのが今の段階で現実的という結論で終わってしまった。これが本質的解決にはなっていないと思う。要職にある人の問題なら、その要職をやめて、指導に専任する道を通るのか、それとも、要職を続けながら、そのような問題がおきないようにFDの問題として取り組むのか、そこのところがあいまいなまま、指導教員変更の解決でとどまってしまった。公の席上で、情報を両方から開示してもらって客観的に判断したかったのであるが、時期が時期だけに難しいことなのか、うやむやになったようである。ここでも信頼関係がくずれてしまって、やむをえず、トップまでも事が運ばれてしまったのであろう。なぜ、それまでにくいとめることがで

きなかったのか、筆者の耳に入ったのは、正式な会議（2004年8月24日）の時で、それまで何も知らなかった。耳の早い筆者でも知らなかったというのは驚きである。それまでに耳に入っていたら、こんなになる前に解決したのにと後悔している。守秘義務があるから仕方のいかも知れないが、事が大きくなる前に何とかしたいものである。

今は、FD問題が大きく取り上げられている時代なのだから、「くさいものにふた」と言わず、解決していかなければ教育学部の教員としてのプロ意識はどうなるのだろうか。どんな学生がきても上手に指導するのがプロではないだろうか。普段から、意識改革意識改革と叫んでいる筆者であるが、筆者も含めて教職員の意識はどうなっているのだろうか。学生・入試委員の副委員長にならされた手前、何か改革しようと2004年3月24日付けで「教師像や学生像について」のアンケートを委員会の委員レベルで調査したところ、11人中たった3枚だけの回答しか集まらず（協力して下さった先生にはお礼申し上げます。）、これが教員の意識なのかとがっかりした次第である。委員に向けての調査を予備にして、教育学部教員全員に対して調査する予定でいたが、これでは無理と思い、中断している状況である（調査にご協力下さった3名の先生方、報告できず申し訳ございません）。

以上から、仮説（1）（2）は支持された。

といっても、あまり具体的に書けないので、論理の飛躍を抱えた上での仮説が支持されたということにしておく。

今後は、具体的な方略を提案することである。

（引用文献）

佐藤公代 2004 大学教育における教授・学習過程と学生の発達過程の関連（3）－指導教官決定要因の検討－
愛媛大学教育学部紀要 第1部 教育科学 第50巻
第2号 63－67

大学教育における教授・学習過程と学生の発達過程の関連 (8)

— 指導教官決定要因の思考実験 (2) —

佐藤 公代

(教育心理学教室)

(平成17年6月3日受理)

The Teaching-Learning Process in University Education (8)

— Thinking about Factor of Determining Teachers' Consultant (2) —

Kimiyo Satou

(問題と目的)

佐藤(2005)の「大学教育における教授・学習過程と学生の発達過程の関連(7) —指導教官決定要因の思考実験(1)—」において、今後の課題として、具体的な方策を提案することである、と締めくくった手前、第2段を考えることにする。それを考える際、信頼関係が一番大事だと思うので、信頼関係のない事例を紹介しながら論を進めていく。

仮説は次の通りである。

- (1) 信頼関係のないところには色々なトラブルが起こるであろう。
- (2) トラブル解消には、人の良い面をみることでどんな人からも学ぶ謙虚な姿勢が必要であろう。

(方法)

- 1) 色々な事例をもとに考える。

(結果と考察)

指導教官を変更し、無事修論を仕上げたXの心境を察するに、Xの言うアカハラは解決されなかったとX自身考えているものと思われる。客観的事実については、筆者は全然わからないので、何ともコメントできない。ただ、人権委員会であちがあかなくなり、トップまでいってしまったという中には、Xの感情にはどめがきかなくなるほどの信頼関係がうすれていたのであろう。それを察して、トップの判断は、指導教官変更という処分を下したのである。それで、Xの心ははれたのかというと、そうではないと推測される。筆者自身のことを振り返ってみても、研究に傾けるとか、推理小説のネタにすると言いながら、昇華、知性化の防衛機制を取ってみても、

逆転移を考えると、完全には癒されていないことを時々思い知らされることがある。完全に癒されるために、トップには、以下のような手紙を筆者個人名で出したのである。出す際に、教室の新指導教官、教室主任には了解を得、残りの2人には、メールを書く際に手紙を出した旨のことを伝えた。手紙の内容を転載する。

「今回のXさんの件から、次のような提案をさせていただきます。人権委員会の中に、精神科医、カウンセラー等の専門家を配属させて、訴える側の意見をじっくり聞き、客観的な判断を下す人がほしいということです。(中略)アカハラを受けた受けないは意識の問題だと思います。いじめの構造に似ていて、いじめているつもりはなくても、いじめられていると感じたらいじめになってしまうのです。信頼関係が一番大事なのです。(中略)これからの時代、色々な人が入学してきます。きめ細かい指導が大事になってきます。そんな時に、じっくり聞き、客観的に判断できる専門家が必要になってきます。ぜひ、そのような取り計らいをお願い致します。」

以上のような具体案を提案したので、今後は人権委員会のあり方も変わるものと期待している。心理主義に陥らない解決策を望まないと、似たような事例が今後たくさん起こるかも知れない。問題提起のような思考実験になってしまったが、解決の一助になればと思う次第である。

ところで、「論語読みが論語知らず」ということわざのように、心理学を研究している研究者が、人の心を読み取れないということは、理論と実践が結びついていないということなので、言い放しでなく行動にも気をつけたいものである。

公の場での事例も含めて、実名をふせて、イ、ロ、ハ、

- 二、ホ、ト、チ、リ、ヌと記述する。
- 1) ネクタイをちょっとさわって話しているとしよう。信頼関係のある時は、全然気にならない仕草であっても、信頼関係のないときには、ぐるぐるまわされて恐怖すら感じるのである。
 - 2) 机をちょっとさわっただけでも、拳を振り上げて机をたたかれたような気になるのである。
 - 3) イは会計係をしていて、お弁当を余さないように気を配った。ロは、「イはケチなのでお弁当余らなかった。」と言った。国語の免許を持っている人が「ケチ」と「やりくり上手」と言う言葉を区別できないのかとイは思っていたら、ハが、そのことを指摘したので、みんなに理解してもらえたということである。
 - 4) 女性が多い中で、ロは性の商品化の話をした。次の日に、イは、「昨日はイメージダウンした。なぜ、女性の前であんな事を言うの」と反省を促したら、「ニはそういうところに花束持っていくんだよ」と、実名をあげながら答えた。ちょうど悪いことをした子どもが、自分よりもっと悪い子がいるんだよと言わんばかりに、答えられたように聞こえてイは、ショックを受けたということである。女性は男性に比べ、イメージを抱きやすいので、あまり人に対してイメージを抱かない方が良い。
 - 5) トラブルを起こす人が、暗幕のついたある部屋を自由勝手に使っていたので、暗幕をはずした。ドアを変えようと提案したら、「あのドアは高いんだぞ、ドアを変えて〇〇でもするのか」と言われ、イは、「私にできますかね」と答えた。
 - 6) 「イは絶対許さん人だから、カウンセラーにあわない」と言われ、イはびっくりしたそうである。言う必要のないところで突然言われ、イは、黙ってしまったそうである。イは、絶対許さないのではなく、性の商品化に問題を投げかけているのに、それすら理解されないのなら考え方が違うということで研究会をやめてしまったということである。イが大学院時代にできた研究会で愛着はあったが、信頼関係のない中で、それに考え方が違ってきた段階で、参加していても意味がないのでやめたということである。
 - 7) 「研究内容の一番遠い人がカウンセラーをやるなんておかしい」と言われたそうである。イは、丁度やろうとしているときだけにショックでやめてしまったということである。それに、スクールカウンセラーをやろうとしているときに、「臨床心理士の会のトから2回電話連絡があって、臨床心理士の資格を持っていないとできない」と言われたと、ホから2回電話連絡があった。イは、それを真に受けていたら、実は、ホは、自分がスーパーバイザーになって、2人にちゃんと臨床の仕事をさせていることがあとでわかり、不信感を持ったということである。ホは、外国で高いお金を払って、きちんと資格を取ってきているのに、イみたいな者に片手間に取られては自分の居場所が脅かされるとも思ったのかも知れないと推測もしたそうである。表面上の和解は有っても、イの心の中はまだすっきりとはしていないということである。前向きに考えるとしたら、大変なカウンセリングの仕事を神様はイにさせなかったのだ、と思えばそれでけりは着くであろう。その意味で、ロとホに感謝しなければならないのであろう。
 - 8) 「イは大学院の入試から逃げています」と言われびっくりしたそうである。逃げていたどころか、イは、学会発表と重なったとき、問題を作ってから、夜行で東京に行き、発表終わって夜行で帰り、採点をして会議に臨んだのである。しかし、ロは、すべてチに任せて何日間も学会に行っているのである。これは投影反応であろう。
 - 9) 〇〇委員長を決めるとき、ロトリはヌをおした。ヌは、イに頼んだ。ロトリがヌと言っているのに、イがやるわけにはいかないので断った。そしたら、ロが「イさん、委員長でなくてよかったね。お茶だしできるから」と言われ、なぜ、そんなことまで言われないといけないのかとイはショックを受けたということである。そのことを筆者は、アカハラ的発言だと思ったが、ジェンダー論の研究をやっている人からみたら、セクハラ発言にあたるということである。どちらにしろ、人をバカにしたような発言は慎まなければならないだろう。あとで、謝られたが、信頼関係のない中なので、今でも忘れられない出来事であるとイは語った。

以上9個の事例について述べた。6個については、何年たっても忘れられないというのは、それほどまでに心の中が癒されていないということであって、別に、人格的に固いとか、ねちこいとか、記憶力がいいとかいうことではなく、トラウマになっているということだと思う。深層心理学的に催眠療法で治すとかいう方法もあるのだろうが、イの好きな心理療法ではないので、防衛機制の知性化、昇華で前向きに生きていくと語っている。信頼関係のない中での対人関係ほど空しいものはないが、筆者は次のような事を心がけている。

(1) 人にはいいところもある。いいところを見て接しよう。

(2) どんな人からも学ぶ姿勢を持とう。

愛媛大学に就職して初めて対人関係に躓いた。それまでは、対人関係の研究など興味がなかったのであるが、色々な人と出会うことによって、色々なトラブルをかかえ、そのたび毎に考えさせられてしまう。

今回の事例からは同じようなことは起こっていない。なぜなら、イは、「事実在即さないことやセクハラ的・アカハラ的発言はやめましょう」というようなメールを送ったからである。そのたび毎にきっぱりと言っておけばこのように何回もいやな目にあわなかったのだろうが、なかなか言えないままに引きずってしまったのであろう。これを教訓にその後は、きっぱり言うようにしているので、以前ほどの心の傷は少なくなっているといは語っている。そして、筆者の言う「人のいい面を見ることがと、どんな人からも学ぶ姿勢をいつまでも保っている」ように意識化させていけば対人関係はうまくいくものと思われる。さらに、補足しておけば、情報というのは一方的に聞くのではなく、両方から聞いて客観的に判断することである。そして、理論と実践を統一した行動をとることである。

以上から、仮説（1）（2）は、ほぼ支持された。

（引用文献）

佐藤公代 2005 大学教育における教授・学習過程と学生の発達過程の関連（7）－指導教官決定要因の思考実験（1）－ 愛媛大学教育学部紀要 第52巻 第1号 55—56

